

関西大学独逸文学会研究発表概要（第103回研究会 発表会）落語「死神」のルーツに関する一考察

その他のタイトル	Resumee des Referates bei der Tagung 2010
著者	上月 富佐子
雑誌名	独逸文學
巻	55
ページ	75-75
発行年	2011-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018019

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第103回研究発表会)

落語「死神」のルーツに関する一考察

上月 富佐子

落語は、350年の歴史を持つ日本の伝承口承話芸である。したがって当然のことながら、落語は日本の話が下地になっている。しかしながら外国話が元になっている落語もわずかながらある。近代落語家の祖と言われる明治期に活躍した三遊亭円朝は、外国話から翻案した落語を作っている。そして、落語「死神」もまた円朝がヨーロッパの死神話を下地にして作ったのではないかと推測される。

死神話はヨーロッパの大抵の国に語り伝えられている話であり、またその死神像も多く描かれている。私たちは、これらの話や死神像から当時の人々の死神に対する思いを知ることができる。一方、日本では18世紀の近松門左衛門の戯曲に「死神」という言葉が初めて登場し、またわずかながら、死神話も存在する。死神像としては、20世紀初めに本竹黙阿弥が死神を掛け軸に描いている。これらの登場はヨーロッパに比べると遅いが、また日本人の持つ死神への思いを知ることができる。

落語「死神」の話の展開や死神像を、ヨーロッパや日本の死神話や死神像と照らし合わせてみると、落語「死神」はヨーロッパの死神像により似ていることがわかる。中でも、グリム兄弟がドイツに伝わる伝承話を編集したグリムメルヘンのKHM44 „Der Gevatter Tod“ (死神の名付け親)との類似点が、多く見られる。

そこで、本発表では落語「死神」のルーツや落語へのルートを探ると共に、落語「死神」の意義を考えた。